

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「杭州西湖の文化的景観」をめぐる世界遺産登録と市民保護活動

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2016-06-02 キーワード: 西湖, 文化的景観, 遺産登録, 遺産保護活動, 杭州 作成者: 阮, 雲星 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00006058

第2章 「杭州西湖の文化的景観」をめぐる 世界遺産登録と市民保護活動

— 文化遺産の再生産 —

阮 雲星

中国浙江大学人類学研究所

訳 星野麗子・姜娜

浙江省杭州市に位置する西湖は、古代より多くの詩人や文人などが愛した風光明媚な地として知られ、現在は観光名勝地として注目されている。「杭州西湖の文化的景観」はその美しさから世界的に高く評価され、2011年6月24日にパリで開かれた第35回の世界遺産委員会で『世界遺産名簿』に登録された。本稿は、この「杭州西湖の文化的景観」を研究対象に、現代における文化遺産保護の登録と保護活動をめぐる市民の参与について考察する。まず、ユネスコの世界遺産となった「杭州西湖の文化的景観」を紹介し、次に市民の文化的自覚、都市の文化遺産保護、および世界遺産の申請登録との関係性について論じる。最後に、世界遺産登録後に生じた杭州の地方政府と市民による遺産保護活動、並びに彼らが直面している課題を提示する。

- | | |
|--------------------|-----------------------------|
| 1 はじめに—杭州西湖の文化的景観 | 4 ポスト「世界遺産登録申請」期における遺産保護の実践 |
| 2 杭州における都市化と文化保護意識 | 5 おわりに—遺産登録申請後の保護課題 |
| 3 西湖をめぐる遺産保護活動 | |

キーワード: 西湖、文化的景観、遺産登録、遺産保護活動、杭州

1 はじめに—杭州西湖の文化的景観

本稿で対象とする西湖は現在、ユネスコの世界文化遺産であり、「文化的景観」として遺産登録されている。文化的景観とは、「自然と人間の相互作用」によって形成された景観を指す。すなわち、西湖は文化か自然のどちらかではなく、双方の相互作用によって生み出された景観を指す。

現代の西湖の文化的景観（以下、「西湖景観」と称する）は、6種類の景観要素から構成されている。第1は、西湖の自然である。5つの水域（外湖、小南湖、西里湖、岳湖、北里湖）と、三面に広がる山脈（南、西、北をめぐる湖の丘陵と峰）がこれにあたる。第2は、都市の中の湖という空間構造である。12世紀から伝えられてきた「三面雲山一面城（三面は山に、一面は城に囲まれている）」と称される湖の空間構造を指す。第3

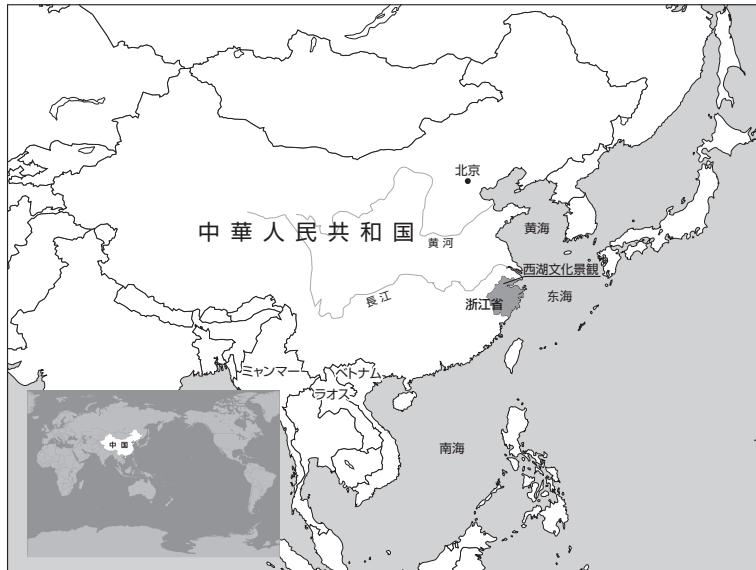


図1 杭州西湖の地図

は、西湖景観の構造である。「二堤三島（9～19世紀の間に、西湖の土砂を取り除いて形成された「白堤」、「蘇堤」、「小瀛洲」、「湖心亭」、「阮公墩」）」の景観構造がこれにあたる。第4は、「西湖十景」である。「西湖十景」は、西湖景観の中で創造性豊かな精神と、芸術的価値が最も反映されている要素である。南宋（13世紀）から今日まで伝えられている詩的表現の命名による、10もの景観（蘇堤春暁、曲院風荷、平湖秋月、断桥残雪、花港観魚、柳岸聞鶯、三潭印月、双峰插雲、雷峰夕照、南屏晚鐘）を指す。第5は、西湖の文化史跡である。数千年もの歴史の中で浸透してきた儒教・仏道・道教という主流文化を体現する、14の史跡（保俶塔、雷峰塔遺跡、六和塔、浄慈寺、靈隠寺、飛來峰造像、岳飛墓／廟、文瀾閣、抱朴道院、銭塘門遺跡、清行宮遺跡、舞鶴賦刻石、西冷印社、龍井）を指す。第6は、西湖の特徴的な植物である。春の桃、夏の蓮、秋のモクセイ、冬の梅という「四季の花」と、中国の伝統的茶禪文化を体現した龍井茶園の景観を指す。

上述した6種類の要素からなる西湖景観は、数千年あまりもこの地で生活してきた人々の文化（現地の地域文化と地域を超えた中華の伝統文化を含む）と自然の相互作用によって、密接に形成されてきた。まず、西湖の景観は、地方官であり文人でもある唐代の白居易（823～824年間の杭州刺史）と、宋代の蘇東坡（1071～1074年間の杭州通判、1089～1091年間の杭州太守）の直接的な管理のもと、大規模な治水整備と造景工事を通して形成された¹⁾。南宋の西湖の成型期（12-13世紀）には、「三面雲山一面城」と称される湖の空間構造が形成し、「西湖十景」という景観の表現法が創立され（『方輿勝覽』1239年）、江南庭園の景観作りの方法も確立し始めた。元の時代は、治水整備と景観造営は基

本的に停滞したが、尹廷高（『西湖十景』で有名）などの文人たちにより、依然として関連作品が作成され続けてきた。明代（1368～1644年）になると、大規模な治水整備により景観再生の基礎がさらに築かれ、羅貫中の『水滸伝』、田汝成の『西湖遊覧志』、周竜の『西湖全図』などの関連文学絵画と民間伝説が登場した。これにより、多くの著名な文化人が再び西湖景観に戻り、感情と審美を投射して創造性豊かな西湖文化をつくりあげた¹⁾。清朝（1644～1911年）は、西湖文化景観が最も盛えた時期と言える。康熙帝や乾隆帝などの皇帝は何度も杭州を巡幸し、湖山や周辺の寺や廟などを全面的に修築した。1809年には、阮元が湖の土砂を取り除き、沖積した土砂を小瀛洲の北に島として築いたことで、西湖の「兩堤三島」の景観構造が形成された。

中華人民共和国成立後、西湖景観は文化古跡として正式に保護された。1949～1983年の間、杭州市文物管理委員会と杭州市園林管理局が、西湖の文物古跡と景観環境の管理をそれぞれ担当した。1952年には、靈隱寺、岳廟、六和塔、三潭印月などの文物古跡や観光場所を全面的に修復した。また、西湖の「兩堤」に伝統的な桃や柳などを植え、公園として市民に開放した。さらに、1961年から2005年には、西湖景観の各場所の人物古跡が国家レベル、省レベル、市レベルの文化財保護単位に登録され、『中華人民共和国文物保護法』などの法的な保護を受けた。とりわけ1980年以降になると、改革開放政策の実施に伴って西湖景観の保護が重視され、1982年には、西湖は国家級の風景名勝地域に認定された。

他方で、1985年杭州市では、「点景題名（景を宛て名を題する）」の伝統を継承し、市民と専門家の協議と投票によって、「新西湖十景（雲栖竹徑、滿隴桂雨、虎跑夢泉、龍井問茶、九溪煙樹、吳山天風、阮墩環碧、黃龍吐翠、玉皇飛雲、寶石流霞）」が選出された。これ以降、西湖景観の文化とその保護への意識が、市民の中で益々高まるようになった。

筆者は、西湖の文化景観保護活動において、その目的や意義、文化的景観の価値の再認識は、次の重要な2つの時期に発したと考える。1つは、1990年代以降急速に発展していった杭州市の都市化の過程であり、もう1つは、2000年前後の西湖の文化遺産の申請である。後者に関しては、杭州政府と市民による「官民一体」の活動によって、成し遂げられたという特徴を持つ。政府は、「還湖于民（西湖の開発によって得た利益を、現地の人々に還元する）」という理念と、「（西湖）総合保護事業」活動の組織化を促し、後述する「三評西湖十景」において、広く市民に参加を呼びかけていった。その結果、市民（本稿では特にボランティアや専門家を指す）は西湖景観保護活動に、積極的に取り組んで行ったのである。最終的に西湖の文化的景観は、世界文化遺産として登録、保護され、文化資源の原動力の一つとなった。以下、筆者は、改革開放政策以降、特に21世紀以降の西湖の文化的景観保護活動に焦点を当て、上述した「官民一致」による文化的自覚と市民参与の諸相に関して論じていく。

2 杭州における都市化と文化保護意識

21世紀以降の西湖の文化的景観保護（世界遺産登録申請の契機を含む）を議論する前に、その前段階として、市民の文化保護に関する意識とその活動を回顧してみることにした。市民の文化保護に関する意識の高まりは、杭州市の都市化と密接な関係にある。

中国の都市化は、①1840～1949年における中国近代都市の開始期（1949年の都市化率は約10.6%）、②1949～1977年における計画経済時代の変動期（1979年の都市化率は約19.96%）、③1978年の改革・開放政策以降の発展期（2009年の都市化率は約45.7%）に分けられる。本稿が指す都市化とは、そのうち改革・開放以降の都市化を指す。改革・開放政策後、杭州の都市化の過程は、1) 第1段階（1978～1992年）、2) 第2段階（1993～2000年における県を跨ぐ発展、即ち「跨県併郷」であり、この段階における杭州の都市の発展は、杭州周辺の県の一部の郷域を杭州市域に編入合併させる政策による発展を指す）、そして、第3段階（2001年以降の江を跨ぐ発展）、即ち「跨江併県」であり、この段階における杭州の都市の発展は、钱塘江の向かいの県を杭州市域に編入合併させる政策による発展を指す）に分けられる。そのうち、杭州市民による文化保護意識の覚醒と

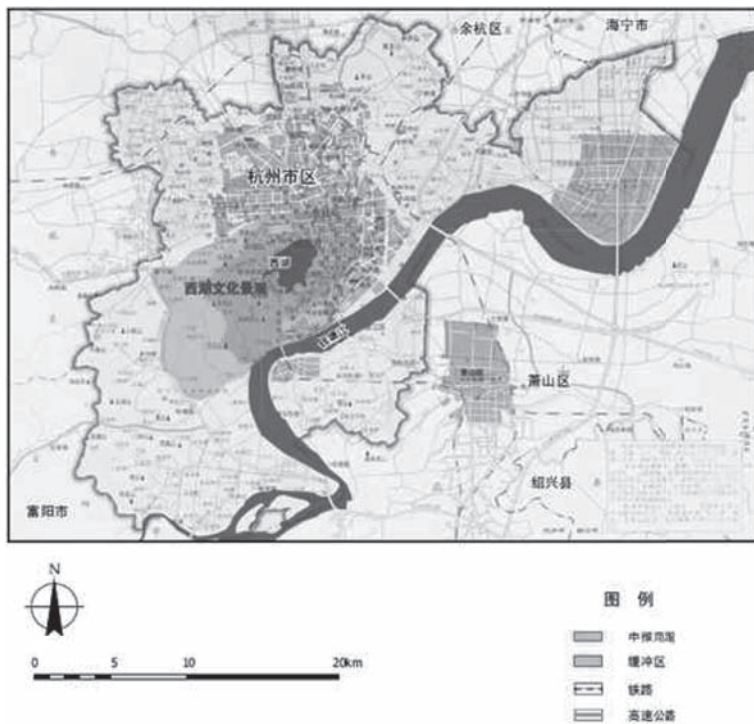


図2 杭州市の都市と西湖文化景観の地図

保護活動は、この第2段階から始まる。

旧市街の発展は、改革・開放政策後の杭州の都市化が起点となっている。そもそも、旧市街はどのように再建、解体、或は保護され、またこれらは、杭州全体の都市化とどのような関係にあるだろうか。都市開発に伴う様々な実践を模索する中で、杭州は最終的に旧市街の徹底的な改造から保護的発展へと広がっていったことが分かる。都市計画の対象は旧市街だけでなく、杭州市周辺の郷や県を市域に取り込み、郷と区の合併や県と市の合併等、次々とその範囲を広げていった。その中で、杭州の大規模な空間における旧市街と新市街との関係が調節されるようになり、西湖などの歴史遺産の保護活用と、都市における新たな開発の関係性が認識されるようになった。杭州の都市化の発展におけるこのような認識と実践は、①国家と地方レベルの都市開発の方針の調整、②世界遺産保護や都市化等の国際的な理念と、それに伴う様々な実践の背景影響、そして、③杭州の都市や旧市街の文化的アイデンティティを有する市民の下から上までの文化保護実践と要求、この3つの要素による重大な促進運動として展開されていったのである。杭州における文化保護運動にまつわる事例を、以下に紹介する。

事例1：メディアと市民による旧市街の文化保護

1990年代、杭州の旧市街は凄まじい勢いで開発されていった。改造方案は、南宋に建てられた「皇城壁」一帯（呉山の麓）の清河坊四拐角建筑群さえも、破壊を免れることはできないほどであった。当時、この一帯の古い建物の全てに「拆（取り壊す）」という文字が大きく書かれており、これらの建物が取り壊されると、この場所には32メートルもの大通りが造られた。

1999年3月、河坊街を広くする工事が開始され、長い歴史文化を有する下町が壊されることが決定した。だが、これに対して4月8日、『浙江市場導報』の副編集長である黄小杭は、杭州市委書記と市長に宛てて、歴史文化遺産の保護を記した嘆願書を提出した。この嘆願書は、杭州市の李金明市委書記と仇保興市長に注目され、翌日、市長は重要事項として、「旧市街の開発において価値ある歴史文化遺跡を保存し、歴史文化名城の文脈の源を極力残すよう努める」という書面を提出した。これにより、旧市街の河坊街の取り壊しは見直され、旧市街の都市化は、「創造的破壊」から保護の方向へと転換した。この嘆願書は、「旧市街の街並みを保存し、新市街を建設する」方向へと転換する重要な契機となったのである。

4月19日付の『錢江晩報』には、「河坊街，讓我們仔細地看看你：杭州古城名街訪思録（河坊街、我々に見させてくれ—杭州市街の記録）」という見出しのトップ記事が掲載された。続いて、4月20日付の『浙江市場導報』の特集には、「清河坊，你不能走（清河坊、我々と共に）」と題した記事が載った。この二つの記事は、歴史や文化の側面から杭州の重要性が記されており、この地を保護するよう訴えかける内容となっている。そ

の後、地元紙『錢江晩報』には、この保護をめぐる連載記事が載り、旧市街の文化保護問題に注目していくべきであると、各業界の人々や杭州市民に呼びかけていった。

5月19日、仇保興市長は河坊街一帯を視察し、「歴史的文化的価値のある旧市街は、保護し、修理すべきで、壊してはならない」と主張した。市、区のそれぞれの関連部門が実地調査を行い、杭州市政府は、この旧市街の取り壊しを直ちに停止するよう要請した。さらに計画、工事、文物保護などの面では、本来あった計画に対して大きく調整を行い、「河坊街清末民初期の庶民文化をそのまま再現するよう」要求したのである。その後、杭州市はすぐに、河坊街大井巷の伝統建築である街巷群落を保護することを決定し、全国に公表して9月初旬に設計案を発表した。

2000年4月8日、杭州市政府は「清河坊歴史街区第一回施行式」を行い、黄小杭が杭州市民の代表として発言した。この日はまさに、政府機関による旧市街の廃墟の解体案を、メディアと市民の力によって文化保護へと変えた記念すべき日となったのである。2001年10月18日、杭州西湖博覧会が開幕し、総長460メートルの杭州清河坊歴史街区が公開された。再建されたこの旧市街には、当時現地住民が居住していなかったために、現地の人々の生活様式も残されていなかった。「歴史文化街区」に伴う観光開発をめぐる市場競争といった様々な課題も蓄積していた。ただし、古い建物や街区景観は比較的良好な状態で保存されていたことから、この地区は後に、世界遺産・西湖保護区の東側の重要な歴史文化景観となったのである。

事例2：杭州の歴史的建築物とその保護をめぐる旧市街の住民

1990年代に杭州の旧市街が再建され、特に河坊街の歴史文化遺産保護をめぐる議論が巻き起こると、社会に広く文化への自覚（意識化）が生じた。こうした改革開放以後の都市計画と市民の文化遺産保護への目覚めは、結果的に、政府による西湖の世界遺産申請につながっていく。上記の事例1は、現地の人々の文化自覚を最も早く気付かせる契機であったともいえよう。

『杭州老房子』の主要作者である仲向平は、このような最も早い時期に現地の文化を記録し、都市の文化遺産活動を行った重要人物の1人である。西湖と杭州の古い建築物に関する10冊余りの書籍のうち、最も早くに出版されたものは2000年9月の『西湖名人故居』であり、杭州の歴史建造物に関するシリーズ作は、主に仲向平によって著された。仲によれば、「資料蓄積そのものは1982年初期、すなわち杭州が『歴史文化名城』に認定された時に始まった」ようである。また、「1冊目を書き始めた1999年、杭州ではすでに大規模な解体作業が始まっていた。当時、河坊街には『廃墟や取り壊し』の文字が見られ、市長である仇保興が担当した際、『清河坊』を解体するのか、それとも保護するのか、これらめぐり争論となった。この時期になって、杭州の歴史的建造物はようやく保護する方向へと変わっていった」のだという。仲氏は、この旧市街地区に長らく居

住していたため、「老杭州」や歴史的建築物に対する関心が人一倍強かった。彼は、長年にわたり現地の文化を自ら記録し、これらを保存できたことに誇りと安堵感を抱いていた。彼は、「最も重要なのは、解体され、失われた歴史的建築物の復興である。第1に、実際に現場に赴くことであり、第2にインタビューをすることである。写真を撮ること以外に重要な作業は、メモをとることである。なぜならばこの作業を行った後、20年ほど後には、本が書かれるからである。第3の作業としては、例えばある旧市街の指導者に、『清河坊』などの旧市街に関する歴史を記録する必要性を強調することである。その多くは早くに取り壊されており、我々はただ図案などの資料を提供するだけである。しかしそれは、時に有効的に作用する場合がある。第4に、積極的に活動を行うことである。世界遺産の登録後に、我々のように政府主催の関連会議に出席する人は今なお多く、これらを有効的に利用する為である」と主張している。

杭州の旧市街における伝統的な建築物の訪問、記録、著作を概観すると、仲向平の初版は、2000年に出版された『西湖名人故居』であることが考えられる。ただ、仲氏自ら評価しているのは、『西湖別墅』(2005)である(南山の澄蘆から西山、北山、湖濱のように時計回りに、西湖を一周して紹介する記述の方法に関して取り上げている)。しかし、これらよりも更に知名度と影響力があるのは、全4巻からなる『杭州老房子』(2003、2004、2009)である。『杭州老房子』は、杭州の歴史的建築物や文人の居住跡地等の古い建築物に関して、何度も実地調査、インタビュー、撮影を行い、資料収集して著したものである。これらの建築物は、銀行施設、旅館施設、商店施設、公共施設、宗教施設、アパート、伝統民居建築、別荘、名人住宅建築、歴史市街区(村落)、新中国成立後の歴史建築、工業遺産建築などの類型に分類されている。これらのシリーズ本は、杭州市民の歴史文化や遺産保護に対する意識にも影響を与えている。2006年、中国で有名な読書(文化生活)インターネットウェブサイト「豆瓣」に公開されている「杭州老房子」の読者ネットワーク「粉絲」の管理者「墜叶飄香砌」は、「杭州老房子」の読者ネットグループの編集に携わるなかで、「学生時代、学校雑誌社の仲向平先生が記した『杭州老房子』がとても好きでした。…(中略)…下町の建築物の歴史やあまりよく知られていない内容が、近代の貴重な歴史建造物の図案によって十分に補われおり、重要な文明の破片である」と語っている。

2013年、『都市快報』と西湖の区図書館が、「西湖周辺の歴史的建造物」という読書会を組織し、同年10月に仲氏を招聘して下町と文化遺産に関する講演会を開催した。講演会では、昔の下町の様子を記憶している現地人のみならず、杭州歴史的建築物に興味のある10代、20代の若い読者も集った。このように、1人の文化保護活動の努力が、より多くの人々に影響を与え、下町の文化遺産保護をめぐる自覚を促してきたのである。

仲向平は、自発的行動によって文化遺産保護に強く影響を与えた「先駆者」の1人であるが、このような人々は決して少なくはない。筆者は本研究に関わる中で、多くの「先

駆者たち」と出会った。例えば、『発現西湖—論西湖的世界遺産価値』や『白居易西湖詩全壁』の書籍を出版した、省の文化行政機構の退職幹部である陳文錦。5回にわたり西湖の世界遺産申請や古都の文化的景観の保護を市委書記に提案し、鉄道業界に勤めた譚啓曉。西湖60年間の変化の目撃者であり、数多くの貴重な歴史物を寄贈した愛好家の丁雲川。80年代、ほぼ毎日路地を歩いて数万枚もの杭州の跡地を撮影し、1999年から2009年まで毎年、小船の銭塘記憶号を運転して運河で写真を撮っていた『老頑童』（腕白な子供のような老人）章勝賢。町の井戸と縁があり、90年代から老杭州の井戸を撮影し続けてきた元大学教師の劉曉偉。さらに、『浙江藏書史』の作者である顧志興や愛好家の趙大川。「純真年代書吧」という読書カフェ店を建設し、杭州文化に貢献してきた朱錦綉。彼らはまさに、文化保護活動を行い、西湖の遺産登録や文化遺産保護活動を導いた、現地市民の代表である。

3 西湖をめぐる遺産保護活動

1970年代末、改革・開放政策が採択されると、中国はまもなく国際化の方向へと乗り出した。1979年2月19日、中国ユネスコ全国委員会が正式に成立し、中国においてもユネスコに関連した活動がますます増していった。杭州にとって、1982年という年は最も意義深い年である。というのも、「杭州市」と「西湖」が第1回目国家級「歴史文化名城」および「国家級風景名勝区」にそれぞれ認定されたからである。この年から、杭州の文化と景観は新たな段階へと突入した。1983年9月、杭州市園林管理局と杭州市文物管理委員会が合併して杭州市園林文物管理局が誕生し、1996年6月、「管理局」は杭州市園林文物局へと改名された。そして、杭州市園林文物局が、西湖景観を含む杭州市各級文物保護単位と園林景観地域を管理することになった。

1999年、杭州市政府が西湖の世界遺産登録に向けて申請することを決定し、2001年から杭州市は10年に及ぶ西湖の保護事業に着手した。これにより西湖龍井茶園の保護範囲が確定し、2002年には杭州西湖風景名勝区管理委員会が組織され、杭州園林文物局と同部署となり、西湖の専門的な遺産保護管理機構が強化された。2005年には、西湖博物館の設立に伴い、西湖周辺の龍井茶園も中国世界遺産登録予備単位に登録され（2006年）、数年あまり続けてきた西湖総合保護事業は明らかな効果を発揮し、2007年杭州市は「三評西湖十景」において、市民を主体とした文化景観保護活動を展開した。

このように西湖の文化遺産登録をめぐる様々な活動は、政府の主導で実施されていったのであるが、同時に現地の市民が西湖を文化遺産として意識する契機とも重なっていた。様々な立場の市民が、西湖の文化保護へと主体的に参加していくことになったのである。西湖が世界文化遺産に登録されるようになった背景は、こうした市民参与の側面を見逃すことができない。このことについて以下、いくつかの事例を見ていくことに

しよう。

事例3：「一般人」による『発現西湖』

2014年10月、浙江省最大の河川・銭塘江の畔にある天元ビルで、『中国都市学年会(2014)』が開催された。この会議で、「第五回銭学森城市学金賞」と「西湖城市学金賞」の2つの賞の授与式が挙行された。専門家の審査を通して閉幕式で「銭学森城市学金賞(「都市文化遺産保護問題」部門)」を受賞したのは、「一般人」である陳文錦の著作、『発現西湖—論西湖の世界遺産価値』(浙江古籍出版社、2007年)²⁾であった。陳文錦氏は真摯な老人であり、彼の受賞した作品は、杭州市西湖を世界遺産に登録するにあたり、最も重要な専門書籍として注目されている。2007年に本書が出版された当時、杭州市は遺産としての西湖の方向性を明確に示していたが、理論的研究や考察に欠けている状況にあった。そうした中、長期に渡り都市の遺産保護と西湖文化研究に従事してきた定年退職した陳氏は、一市民としてその研究に取り組み、一年あまりの時間をかけて、『発現西湖—論西湖的世界遺産価値』を書き上げ、世界遺産登録申請に貢献したのである。2014年10月授与式前の「都市文化遺産保護問題」フォーラムで陳氏は、「文化遺産保護に直面する挑戦と対策」と題する基調講演を行い、中国都市文化遺産保護に対する新たな提案を行った。フォーラムの後、筆者も陳氏から『白居易西湖詩全壁』(西泠印社出版社、2013年版)を賜ったが、これも上述した『発現西湖』に続く西湖文化研究の成果の一つであった。

陳氏は『白居易西湖詩全壁』の「あとがき」で、「私は造詣深い専門家でもなければ優



写真1 専門家による「銭学森及西湖城市金賞」審査の様子(阮雲星撮影 2014.10.25)

秀な政府官員でもない。学問と行政の間をさまよう一般人にすぎない」と記している。陳氏が自らを「一般人」と称しているのは、謙遜した態度と見受けられるが、それもまた事実である。というのも、第1に、彼は長期にわたり省や市の文物担当の幹部をしてきたが、少しも官僚らしくなく「一般人」として人と接しているからである。第2に、彼は定年退職後、「一市民（一般人）」として自主的にこの2冊の本を書き上げたからである。彼は北京大学を卒業した後、1980年代より杭州市園林文物局と浙江省文物局で重要な役職を務め、西湖の申請登録活動の先駆者として活動してきた。重要なのは、彼の行動が西湖文化に対する愛着と責任感から、1人の市民として自ら行動したということである。

陳氏のような西湖文化に対する愛着と責任感は、杭州の文化に自覚的となった他の市民にも共通している。これらの活動は、西湖をめぐる遺産保護の活動をさらに促進させていくことになった。その一例として、次に「三評西湖十景」における市民参加について見ていくことにしたい。

事例4：「三評西湖十景」の市民参与

本稿の冒頭で論じたように、「西湖十景」は西湖を代表する文化的景観であり、また「心と物（人と自然）の対話のモデル」を形成してきた。「心と物の対話のモデル」とは、1000年前の知識人による唐宋時代の哲学（天人合一）、美学（中和）、統治術（徳治教化）の観念と知識のモデルを指す。このモデルは、時代を超えて伝えられた文化・文明を表していることから、唐宋時代以降も美的判断による造園や風景の形成といった、景観の文化システムとして、人々の心の中で培われ伝承されてきた。1985年に「新西湖十景」の評価・選出が行われ、2007年には「三評西湖十景」の評価・選出が行われた。この2つのイベントは、「審美造景（人々の美的判断による景観の形成）」や「四字景目（景観の名称を4文字で表す）」といった景観構造と景観命名の古典的形式で選出された。「二評」や「三評」の事例から、これらのイベントでは、伝統的審美や景観モデルが現代において再創造されていることが見えてくる。なぜならば、多くの市民（民衆、一般人）が景観のイベント（評価や選出）の実践に積極的に参加しているからであり、これは、①現代の人々との対話、②美的感覚、③景観の構造・命名等、景観の評価・選出が、現在においても重要な内容を示しているからである。筆者はこれを「主体的開拓」と称する。中でも、「三評西湖十景」はこの特徴が最も反映した顕著な例であると考えられる。

周知の通り、1985年に「新西湖十景」の選定が行われた背景には、以下の3つが関連している。第1に、選定の前年、国務院によって杭州が中国の著名な風景都市として認定されたこと。第2に、杭州市園林文物局（日本の公園管理局に相当）が多くの景観を建設または修築したこと。第3に、これにより中国国内外からの観光客が増加したこと、である。このイベントには、杭州日報社、『風景名勝』誌（風景区名勝協会建設部の宣伝雑

誌で当時『園林与名勝』と称されていた)、浙江テレビ、杭州市園林文物局(日本の公園・文化財管理局に相当)、杭州市観光会社連合事業委員会が共同で活動しており、特に杭州日報社と『風景名勝』誌の2つが中心となって活動を展開した。

① 大学生のボランティア参加

「三評」の参加者の中で最も重要な役割を占めるのが、大学生である。「三評」の主な活動は、7、8、9月の夏に集中しており、大学生の夏季休暇とも重なる。この時期、学生組織やボランティア(当時、十数組もの団体が存在していた)を中心に、大学生が「三評」活動の実践者として参加する。彼らは夏季休暇における社会的実践の教育目標と合致して、熱心に知識と技能を使って「三評」の宣伝や統計など様々な作業に携わる。多くの団体は、其々の専門知識を生かして「三評」の調査報告、映像やテレビによる記録等を作成する。こうした専門的な作業に関して、大学生が果たす役割は非常に大きい。彼らは、「三評」の参加に大きな貢献を齎すと同時に、西湖文化への理解をより一層深めていく。最終的に、彼らは西湖文化景観を再創造し、文化遺産を後世へと伝承する源泉にもなっている。

② 団体と個人の参与

「三評」の活動は、現地の団体や個人も参与している。一般人からなる団体の参加は、江干区凱旋街道の例が典型的である。江干区凱旋街道は、新たに市街に合併されたばかりの町(街道)である。街道13の社区に管轄されており、5万人程の住民を数える。街道には、社区住民の文化と教育の活動場所である「Community」^{コミュニティ}があり、「三評」の活動も「社区学院」と結びついている。7月初旬、凱旋街道の社区学院は街道婦人連合会と共同で「三評西湖十景」の開催式を挙行し、江干区と凱旋街道の政府関係者(江干区教育局副局長、江干区婦人連合会副主席、凱旋街道党工委副書記、江干区教育局職業与生人教育科科长等)が出席した。加えて、13社区の住民合わせて150人余り(其々の社区から10人ほど参加するよう事前に知らせがあった)が参加し、関連メディア各社も参加して、その活動を報道した。社区における選定は、まず景観地と景観名を推薦し、その後投票するという順番で進んでいった。各社区では半月ほど集会を開いて評議し、景観地と景観名を集計してまとめる(この段階で約1,000人近くの住民が参加している)。その後、景観地と景観名の投票が行われ、凱旋街道と社区居委会の関係者は、投票箱を持ち住民の家を回って投票を呼び掛けた。その結果、各社区で投票した人数は、合計1万人余りまで達した(参加率は5分の1である)。参加した住民の中には、一部の主体的な参加者を除き、そのほとんどはこの呼びかけの影響を受けて説得されて参加した人々である。彼らの中には、元々この活動に対し参加する意向を表した者もいたが、これらの人々とその他の参加者は確実に動員の参加を通して関わったか、或いは西湖文化に対

する理解やアイデンティティによって興味を持ったかのいずれかである。

それに対し、一般の人々が個人的に「三評」に参加することもある。この個人単位による参加は、文化保護への意識を持った市民で、自発的に参与している。「三評事務室」の責任者で、西湖博物館の元館長である呉勝天は、次のように当手を回想する。

「2007年に『三評』が開かれると、私たちは杭州市民の故郷、西湖に対する郷土愛が非常に強いことを実感した。参加者は、幼児から90歳の高齢者まで幅広い年齢層の人々である。ある者は、ここに来て美しい景観に合った景観名を書き、家に帰ってはまた熟考し、次の日に再び私たちの所に来て書き直していた。そのようにして、最後に完成したのが新たに選出された『西湖十景』だったのである」。

これは、「三評」における市民の参加数がただ単に増えただけでなく、市民が自主的に参加していることを意味する。現地の人々の「三評」の参加において、78.3%の参加者が大専（専科大学）或いはそれ以上の学歴を有しており、高学歴の「主体的な」市民が参加していることが顕著にみとれる。

③ 知識人の参加—文化の自覚と集団活動

藍園書社は、杭州の園林文化研究を広める民間学術組織で2000年に建てられた。浙江大学園芸学部の前教授・葉氏が組織事務の責任者であり、65人を抱え、その中心者は30人ほどである。書社の中心者は、浙江大学、浙江工商大学等の専門家、浙江省農科院、省林科院、杭州市農科院等の研究所の研究員、省農業庁、市園文局、市農業局等の部門の技術員、および省、市科普作家、風景園林、地理、気象、生物、観光並等に特化した専門家であり、彼らによって組織されている。杭州園林文化研究に精通する、文化知識人の団体であるといえよう。

藍園書社の社員による「三評」参加は、「知識人による自発的な参加（葉教授の言葉である）」、或は「エリート集団による主体的な参加」である。責任者である葉教授は、当時6月22日付の『杭州日報』で「三評」活動を知り、景勝地の推薦を始めたという情報を入手し、その後書社で開催された「三評」景勝地の集会とも重なり、多くの専門家による積極的な協議のもと、80もの推薦景勝地が集まった。その4ヶ月後、さまざまなレベルの市民による投票が始まったのであるが、そのなかで彼らは専門家として意見を提示することに意識的になった。彼らは、意見を直接「組委會（西湖新景観地評選活動組織委員会—審議機関）に送り（市民は一般的に提案を「三評辨」（『三評西湖十景』事務室）—事務機関に提出する）、それが評価され重視された。杭州市委書記の王国平氏は当時、「彼らの活動を評価する。藍園書社の同志たちに心より感謝したい」とコメントした。

このように、「文化エリート」集団の活動は、「三評」をめぐる市民活動において特徴的な役割を有していた。藍園書社は、政府によって組織された団体ではなく、2000年に

初めて専門的な社会組織として登録、発展したのである。次の事例は、藍園書社の内容と同様、専門的な知識人により西湖世界遺産申請と保護活動がなされたものである。その中心者は、西湖遺産登録に多大な貢献をなしてきた。

事例5：「純真年代書店カフェ」と市民による申請活動

宝石山は西湖の北に横たわり、西湖の内側の山脈に位置している。湖の北、西、南の三面と、その外環、中環、内環の山脈の中に、地層年代の最も若い岩があり、低くて緩やかな山脈があるが、それが宝石山である。宝石山は北宋以来、山の東端の脊梁に仏教建築である保俶塔が建てられていることから有名である。1985年杭州で「新西湖十景」が選出された際、宝石山の景観は「宝石流霞」の景観名として、西湖の新たな十景に選ばれた。



写真2 「純真年代書店カフェ」から眺めた西湖（阮雲星撮影 2014.12.14）

現在、「宝石流霞」の景観の道標は、北山路の保俶塔がそびえる山の麓の湖沿い側の歩道に設置されている。道標の矢印の方向に沿って進み、北山路を北へ越えて宝石山の麓から登ると、保俶塔がある。この道の中間の山の中腹に開豁地があり、旅行者が一休みして、西湖景観を眺めたりする。伝説によれば、ここは過去に英国人である梅藤根が建てた建物であると言われている。ところが現在、この建物の中に定住しているのは、「純真年代書店カフェ」と称される店である。



写真3 宝石山の中腹に位置する「純真年代書店カフェ」
(阮雲星撮影 2014.12.14)

「純真年代書店カフェ」の店長である朱錦繡は、元々大学の英語教師であり、大病を患ったことをきっかけに、西湖に文学や文化をテーマとした書店カフェを開店した。開店まで様々な困難があったものの、朱錦繡の建てた書店カフェは現在、杭州の文化人や一般人に向けた人々の文化空間の場となっている。2009年「純真年代書店カフェ」が、宝石山の中腹に建てられて以降、カフェは多くの人々に利用され、西湖における豊かな文化がこのカフェで広まっていった。こうした創造性豊かな文化空間の広がりには、ある一人の特別な客人の訪問と評価によるところが大きかった。朱錦繡は次のように語っている。

「2010年9月29日は雨であり、道を歩くのが大変であった。この日は、専門家の一行が調査した3日目にあたり、彼らは一か所だけでなく西湖の周りを歩いて調査していた。そのうち、海外から来たある女性専門家は、雨の中に書店カフェの明かりが書斎の明かりと同じように温かみがあることを見て、写真を撮った。私は彼らが山から下りてきたところを見ていたので出迎え、「Welcome, I'm the owner of this book bar」と言い店に招い

た。彼女は「Wow, beautiful place.」と言ってカメラを取り出したので、私は、「Yesterday is Anniversary of my book bar.」と答えた。すると、彼女は「Really? I should have been here last night.」と言った。もともと私は彼女を門の対聯の前に座らせようと思ったが、彼女はずっと座らず写真を撮っていたので、「西湖は美しいでしょう。中国では昔の詩に『晴西湖不如雨西湖（晴れの西湖は雨の西湖に及ばない）』と言う言葉がありますが、あなたはまさに美しい時に来たのですよ」と話した。そして、私は西湖の景勝地を紹介し、西湖は淡水湖であり、杭州の都市そのものが西湖と山を含めた環状につくられていて、この位置がその中心であること、西湖十景のうち八景を見ることができる好スポットであること、それゆえ市の指導者も公共空間である『純真年代書店カフェ』がここに開店することを許可したことを話した。専門家の一行は5分しかいないつもりであったが、彼女は私と写真を撮ったり、名刺を交換したりしてここを好きになったようで、結局15分もここに留まったのである」。

この特別な客人である女性専門家とは、文化遺産に対する市民の意識や遺産の保存の継承を重視するイコモス（ICOMOS: International Council on Monuments and Sites）の韓国人専門家・朴素賢（Sohyun Park）教授である。朱錦繡は、彼女の経営する書店カフェが西湖の文化的景観の遺産申請に確実に花を添えたと誇らしげに語る。朴素賢教授が再び杭州に来た時、「純真年代書店カフェ」のことを聞いたことから、彼女が書店カフェでの感動的な話を気にかけていたことが分かる。杭州風景名勝区管委會主任である劉穎氏は、「イコモスの専門家の実地調査の力点は遺産の保護管理にある。朴素賢教授は長きにわたり、アメリカと韓国で都市計画教学研究と都市設計の仕事に関与しており、都市計画、生態保護、住民の文化遺産保護管理の参与に対し、強い関心を持っている」と言う。この実地調査の後、朴教授は評価報告をイコモス本部に提出した。その後、イコモスのあらゆる遺産申請評価には、最も基本的な要素として、2点書かれている。1つは遺産申請テキストの価値の陳述。もう1つは、朴教授が提出した現場評価に関する報告である。彼女は、現在の西湖の保護管理を確認した後、遺産価値の認定を行った。

2011年6月24日、フランスのパリで第35回世界遺産大会が行われ、中国の「杭州西湖文化景観」が満票を獲得して、『世界遺産名簿』に登録された。この結果は、朴教授が作成した評価報告の中に見られる。彼女の書店カフェの感動と市民の遺産保護活動の考察内容を含んだ現場での評価報告は、説得力がある。「純真年代書店カフェ」のような杭州市民の文化保護活動は、西湖の文化遺産登録申請において独自の貢献をしてきたことが分かる。

4 ポスト「世界遺産登録申請」期における遺産保護の実践

2011年6月24日、フランスのパリで第35回世界遺産委員会が開かれ、その席上中国世界遺産プロジェクト「杭州西湖文化景観」が、21の委員国の一致により世界遺産として登録された。これにより、杭州西湖文化景観の世界遺産登録は、同時にポスト世界遺産登録申請の保護伝承という新たな時代に突入した。

2011年、杭州西湖文化景観の世界遺産が登録されて以降、杭州市政府は保護並びに文化伝承を行うため、保護法や検査基準を見直し、杭州内外における資源等の遺産保護事業に乗り出した。その中で、政府のみならず、現地の人々も世界遺産保護の理念を理解するようになり、積極的に参加していった。

総体的に見ると、杭州市政府は遺産保護を非常に重視し、遺産保護活動を積極的に行って、遺産保護管理機関を設立している。例えば、「杭州国際都市学研究センター（杭州都研センター）」があるが、この研究機関は分野を超えて活動し、資源活用型の保護研究を展開して、管理機関による効果的な参与と市民の動員、並びにこれらに対する管理保障を行っている。杭州市民は世界遺産登録申請後、西湖文化景観の世界遺産保護に参加し、政府の指導と協力の下、制度的、組織的に展開している。

事例6：「杭州都研センター」における専門家と市民の参加

都市文化保護研究を含めた総合的な都市研究の学術機関「杭州国際都市学研究センター（杭州都研センター）」は、杭州政府主体の指導と協力の下に展開されている。ところが、その作業は実際、主に専門家と一般市民の参加によって共同で行われている。「杭州都研センター」機関内にある「杭州都市学研究会」は、2010年杭州市政府で批准された都市学や杭州学の学術的、地域的、非営利的な社団組織である。会員は105名で、主に杭州の各大学や研究機関の専門家、また退職した学者や専門的知識を有する官僚も含まれている。彼らは、学会員の身分で制度的／非制度的な研究や、遺産保護事業に携わっている。

制度的な遺産保護事業に関しては、毎年おこなっている「銭学森都市金賞」と「西湖都市学金賞」が最も影響力あり、特に「西湖都市学金賞」は、市民の遺産保護活動の参加に対して奨励する賞である。毎年下半期、2週間ほどにわたり「西湖都市学金賞」の市民投票が行われる。上半期に、市民から募集した遺産保護のアイデアのうち、100個の「優れたアイデア」を公開して、インターネットによる市民投票を行う。市民投票の結果、選出された20の「アイデア」は、大きな影響力となっている。市民の投票結果とその後の専門家による審議会から、最終的に10の「アイデア」が選出される。毎年秋に其々の賞が決定されるが、これらの活動は、都市において文化遺産保護等の理念を広めるのみならず、都市の歴史遺産をめぐる制度的市民保護活動のメカニズム形成

にも寄与している点で、非常に重要である。

事例7：西湖景区市民のボランティアサービス

西湖文化景観の世界遺産保護と、西湖景区の明観光、観光地で密集する際の案内役等のボランティア活動には密接な関係がある。西湖景区のボランティアは、観光地と遺産保護において重要な役割を果たしている。杭州西湖ボランティア志願者の本隊（団体の中心組織）は、2004年12月5日に成立した。その多くがボランティア志願者として参加しているが、それには特別な背景がある。杭州のボランティアは、1993年12月の早期に西湖グリーン運動の中で誕生しており、この年は杭州ボランティアの元年とも言われている。2013年現在、杭州西湖風景名勝区（杭州市園林文物局）に属する杭州西湖ボランティア本隊は2600人を数え、登録している団体は30である。そのうち10の支部団体と33の青年別働隊（青年の中心的活動組織）がある。また、ボランティアの拠点として、12のボランティア基地と10の大学が登録している。さらに、西湖景区の中柳浪聞鶯、蘇堤春曉、曲院風荷、雷峰夕照という4つの名所に4つの「微笑亭」（サービスの窓口）が建設されている。これまで活動してきた彼らのボランティア数の統計は、累計46万人を数え、その合計は276万時間を超える。その主な活動内容は、西湖の世界遺産登録の宣伝や、休日の観光サービス、西湖文化宣伝、西湖山林の管理保護、西湖環境保護、文物保護の科学普及、社区サービス、大規模な大会などである。彼らは、西湖文化遺産登録と西湖文化景観世界遺産の保護活動のために、重要な貢献を果たしたのである。

事例8：新しい文化的景観の創造

世界遺産登録後、市民は、杭州市政府主導の下、様々な活動に積極的に参加していった。それは「官民一致」の実践であり、西湖文化景観の保護活動の最大の特徴である。しかし、市民の参加が、政府の指導と協力による制度的、組織的参加の特徴であるならば、どうして市民は主体的にこのような活動に関わることができたのであろうか？

上述した事例5の『「純真年代書店カフェ」と市民による申請活動』から、カフェ店長、朱錦繡の西湖に対する愛着、文化遺産保護の自覚、そして行動が、非常に大きな影響力を占めていることを見てきた。このような様々な実践が、多くの市民や政府の市民文化遺産保護活動の認識、態度へと広く影響を与えていった。市民保護活動の各界における認識の変化は、景観保護活動と市民の草の根運動において持続され、益々発展していったのである。

2014年、杭州で「西湖読書会」が行われたが、これは杭州にとって8年目のことである。近年、「純真時代書店カフェ」の「西湖読書会」の分会場で、文学サロン、作家によるサイン会、読書会、詩を楽しむ会等が行われ、西湖の美景の吟詠や「文学文化サロン」が開催された。2014年、書店カフェの「西湖読書会」会場には、「イベントは多くの人

を楽しませ、参加意欲を駆り立てるものである」と記されている。このような背景から、我々も「千人快閃頌西湖」の朗読会を設立した。



写真4 純真年代書店カフェでの文化活動の様子（阮雲星撮影 2014.12.18）

「快閃」とは、近年国内外で、都市社会生活において注目されている一般市民向け芸術活動である。これは、意表を突き、新奇変幻で、参加者を錯乱させる形式を特徴としており、都市の多忙な日常生活と異なり、ゆとりある文化観賞の場を提供する。2014年5月24日、五支分団体組織100余人の市民ボランティアを中心に、西湖白堤の一带で「快閃頌西湖」活動が行われた。このような市民参加による様々な西湖の文化活動は、同時に、現在における新しい西湖の文化的景観の創造でもあると、筆者は考える。

4 おわりに — 遺産登録申請後の保護課題

以上、西湖文化景観の世界遺産申請登録前後における、杭州市民文化遺産保護活動の参与の実践と、その過程を考察してきた。2000年以降、杭州の遺産をめぐる市民参与の保護活動は、政府の指導と協調の下、制度的、組織的な参加の特徴が顕著に見られた。同時に、市民の文化自覚が次第に覚醒され、市民の自主的で主体的な保護活動が、特定の空間と草の根運動の中で更に発展してきたことを見てきた。文化遺産登録後、杭州では「官民一体」の西湖文化景観の世界遺産保護活動が展開され、多くの効果を齎してきた。しかしながらこの中で、我々がさらに重視しなければならないのは、市民組織による保護活動の不足の問題である。ユネスコの遺産保護理念が次々と更新される中で、中

国が直面する新たな都市社会での歴史景観保護をめぐる、市民保護参加の課題が残されているのである。

ユネスコは、1992年に世界遺産として「文化的景観」を登録した。その後2003年に、人類の精神に基づく『保護非物質文化遺産公約（無形文化遺産の保護に関する条約）』を採択した。2011年に、文化的景観の保護を通じた都市遺産保護と都市再建による『関於都市歴史景観的建議書（歴史的都市景観に関する勧告）』を発表した。これら3つの文化遺産、即ち「文化的景観」保護、「無形文化遺産」保護、「歴史的都市景観」保護は、いずれも文化遺産保護における文化保有者の主体性と、それに伴う法の合法的措置の保障を重視している。また、それと同時に、文化遺産保護に登録された社区（地域社会）や、そこに住んでいる人々の保護活動への参加、文化遺産保護に伴う人々の利益の要求にも注目している。例えば、ユネスコはここ数年、『歴史的都市景観に関する勧告』において、地方の「都市における歴史的景観（HUL）」による「市民参加による手段」を提出している。そこには、「市民参加による手段は、様々な利害関係者を横断的に関与させ、これらの利害関係者が都市地域における主要な価値を特定し、自らの多様性を反映した物の見方を構築し、目標を設定し、自らの遺産を保全し持続可能な開発を促進させるための活動に同意することを可能とするものである。これらの手段は、都市の統治の力学の不可欠な部分を構成するものであり、歴史、伝統、価値、ニーズ及び要望について地域社会から学ぶこと並びに対立する利害を抱える集団の間の仲裁及び交渉を促進することにより、文化間の対話を促進すべきである。」ⁱⁱ⁾と記されている。

ユネスコの文化遺産登録後の新たな理念に基づき、杭州都市における歴史遺産保護活動の状況と我々の研究から、①市民の文化遺産保護活動と、②これに伴う都市計画の再生産の課題に関して、以下3つを提案する。

第1に、自発的な「賦権（権限を与える）」型の市民による保護活動の参加である。現在、杭州文化遺産において、市民の保護活動は、政府の強力な指導と協力の下、「吸収」型の市民保護活動が顕著であり、観光開発地周辺の社区住民の参加もこのような特徴を有している。「吸収」型の市民保護活動の優位性は、上記の事例で論じたように、非常に効率性が高く、政府主導の保護活動による組織化と秩序化が顕著である。しかしながら、この「吸収」型の市民の保護活動は、政府の権限の制約から活動の広さと深さにおいて不十分であり、それ故、社区住民の自治的な管理による改善が待たれる。他方で、「賦権」型の市民保護活動の参加は、国家法治化や現代管理システムによって実現可能である。この「賦権」型の市民保護活動は、より高い理想を持ち、適切な時期を見計らって、社区管理や都市の歴史景観保護の契機と合わせて展開し、改革を転換することができる利点を持つ。これにより、市民の自主性や創造的な保護参加の空間を拡大でき、市民が文化の主体的な保有者として、草の根運動や政府との相互体制を形成、強化できるのである。

第2に、文化活動を促進する企業等の市民による自主的な組織の参加が挙げられる。上述したように、「純真年代書店カフェ」のような市民組織は、政府とは異なり、文化保護活動を促進させようとする能動的な活力と工夫が見られる。現在、このような組織は商業や社会組織に関する法律の下、市民商業或いは民間経営の非企業単位（民非）による保護参加として、登録することができる。そして、社会的企業の性質を有した文化産業や、社会／社区法人等の組織を作ることができる。それは正に、利益保証といった法律の下、持続可能な市民の自主的な組織の文化保護活動と共に、政府や各業界等の輪へと広げることができるのである。

第3に、保護に関する研究の国際的参加の介入である。2012年10月26日に発布された『歴史都市景観保護連盟杭州宣言』で、「共同致力于歴史都市景観保護研究」が提唱された。そして、「杭州国際都市研究センター（杭州城研センター）」が設立し、境界を越えた国内外の資源の整合による実践が展開された。この西湖文化景観の世界遺産化により、国際社会における参加と保護に関する研究の時代へと突入した。我々は、文化保護研究をめぐる国際的な保護参加のニーズに対し、高等教育や研究機関等の特徴を最大限に発揮し、国際的な学術交流を促進して、杭州文化と歴史遺産の保護研究を更に発展させることができる。

その他、広義の意味での文化保護研究には、欧米や日韓などの国際的な専門家も含まれており、彼らは文化遺産保護の実践をめぐり、契機と条件を広く提供する。国際社会における研究者や知識人の獲得により、杭州の伝統文化を保護・伝承でき、未来に向けた文化の都を築くことができるのである。

注

- 1) 西湖の人文景観における東アジアに対する影響力は、中国の水墨画、仏教禅宗、西湖景観の造園設計等、中国から他地域へと伝わった様々な文化から理解できる。それは特に、宋代に始まり、明代に盛んとなったと言われている。例えば、宋代の水墨画が繁栄すると、まず宋朝へ渡った日本の僧侶が、日本国内へと持ち帰り、『西湖図』が日本の水墨画の題材となって、数世紀もの間、広く人々に知れ渡り、流行したと言われている。また、西湖景観は15世紀以降、日本の小規模な造園芸術にも広く影響を与えている。朝鮮半島での伝播状況も同じようである。このように、西湖の人文景観は、東アジアの景観設計史等の文化領域からも、その影響力の大きさを窺い知ることができ、西湖景観が歴史的に重要な地位にあったことが分かる。
- 2) この本は、陳氏が初めて体系的に西湖の世界遺産の価値を論じた書である。彼は、人類による世界遺産保護を、幅広い関心と実践によって考察した。生態資源と文化資源の分野から、全体的な「西湖」の発展を、考古学、歴史学、文学、美学等の学術的観点から論じている。彼は、「西湖文化—西湖本質上是一種文化形態（西湖文化—西湖は実際、独自の文化形態を有している）」という独自の観点を論証し、西湖文化の特徴を「極具自然親和力的和諧之美（自然と調和の美）」、「深沈醇厚的人文之美（深みのある人文の美）」、「時空変換中的流動之美（時間によって変化する空間の美）」と表現した。

訳注

- i) 刺史は、前漢から五代十国時代まで、通判と太守は宋時代に、設置された地方官職名を指す。
- ii) ユネスコが発表した『歴史的都市景観に関する勧告』の「市民参加による手段」は、日本国内ユネスコ国内委員会が公開するHPの訳文を参照した。
<http://www.mext.go.jp/unesco/009/1351836.htm>

参考文献

●日本語文献

河合洋尚

2013 『景観人類学の課題—中国広州における都市環境の表象と再生』風響社。

河野 靖

1995 『文化遺産の保存と国際協力』風響社。

辻中豊編

2014 『現代中国の市民社会・利益団体—比較の中の中国』木鐸社。

●中国語文献

陳錦文

2007 『発現西湖：論西湖の世界遺産価値』浙江古籍出版社。

陳錦文編

2013 『白居易西湖詩全璧』西泠印社出版社。

单霁翔

2010 『文化景観遺産保護の相関理論探索』『南方文物』(1)。

方 憶

2006 『15-19世紀日本画家笔下的『西湖图』』張建庭主編『杭州文博』3(1):61-70。

韓 鋒

2013 「城市歴史景観—概念、視野及机遇」杭州国際城市学研究中心編『中国歴史城市景観保護發展報告(2013)』, pp.14-19、杭州出版社。

杭州国際城市学研究中心編

2013 『中国歴史城市景観保護發展報告(2013)』杭州出版社。

杭州市園林文物管理局編

1990 『西湖風景園林 1949-1989』上海科学技術出版社。

河合洋尚

2013 「客家建築与文化遺産保護—景観人類学視角」『學術研究』341:55-60。

横山廣子

2014 「博物館以及城市文化遺産の保護与發展」喬健・王懷民主編『黄土文明一亮点: 介休市保護文化遺産与發展城市文化論述』, pp.45-75、華芸學術出版社。

黄小杭

1999 「大文化視角—保護与開發」『觀察与思考』5。

林華東・林盈盈

2011 『秦漢以前古杭州』杭州出版社。

- 林正秋
2013 『西湖文化景觀史研究』浙江古籍出版社。
- 林志宏
2010 『世界文化遺產與城市』同濟大學出版社。
- 馬智慧
2013 「歷史城鎮保護的HUL方法研究——以杭州為例」杭州國際城市學研究中心編『中國歷史城市景觀保護發展報告(2013)』, pp.323-335、杭州出版社。
- 王國平主編
2004 『西湖文獻集成 第二輯 宋代史志西湖文獻』杭州出版社。
- 王 露
2007 『源自天壤、惠及天下——論「西湖十景」的形成與發展』杭州西湖博物館編『西湖學論叢』1 (4): 29-40。
- 王 曉
2013 「城市化背景下的文化景觀遺產保護思路與策略——以杭州為例」杭州國際城市學研究中心編『中國歷史城市景觀保護發展報告(2013)』, pp.295-31、杭州出版社。
- 吳艷玲
2009 「中國城市化的歷史進程、現狀及對策」『經濟研究導刊』36 (74)。
- 中華人民共和國國家文物局
2011 『世界遺產公約申報世界文化遺產——中國 杭州西湖文化景觀』。
- 中國市長協會『中國城市發展報告』編輯委員會
2003 『2001-2002中國城市發展報告』西苑出版社。
- 仲向平
2000 『西湖名人故居』杭州出版社。
2005 『西湖別墅』杭州出版社。
- 仲向平等編著
2003 『杭州老房子』中國美術學院出版社。
2014 『杭州老房子』(四編) 浙江大學出版社。
- 楊曉茹
2013 「歷史城市景觀保護發展研究報告——以「活態遺產」杭州西湖文化景觀為研究對象」, 杭州國際城市學研究中心編『中國歷史城市景觀保護發展報告(2013)』, 杭州出版社: 159-170。
- 周峰主編
1997 『南北朝前古杭州』(修訂版) 浙江人民出版社。
- 周丹丹
2014 「海外人類學的風景研究綜述」『中國農業大學學報(社會科學版)』31 (2): 108-114。

●ウェブサイト

- The World Heritage Committee
<http://whc.unesco.org/en/committee>
- World Heritage List
<http://whc.unesco.org/en/list/1334>
- 杭州記憶網 | The Spirit of Hangzhou
<http://www.hangzhoumemory.com/>

杭州歴史建築保護

<http://www.hzfc.gov.cn/lb/index.php>

杭州市住房保障和房産管理局

www.hzfgj.gov; www.hzfc.gov.cn

『国家新型城鎮化規則劃（2014-2020）』

http://www.gov.cn/gongbao/content/2014/content_2644805.htm

「中国城市化進程」

<http://baike.haosou.com/doc/2215390-2344209.html>

Bluesky: 「杭州的城市化進程」(2010-01-06)

http://blog.sina.com.cn/s/blog_726411060100pyam.html

王春光: 「对中国城市化進程、現状和未来的社会学思考」2010

<http://www.docin.com/p-56673756.html>

中国民主建国会浙江省委: 「杭州河坊街改造工程暫停 保存古城名街仍須各方努力」(1999年4月)

<http://www.zjol.com.cn/05zjmj/system/2005/11/17/006370477.shtml>

「記者揭秘: 申遺大考 西湖如何「考」出高分」

http://www.china.com.cn/economic/txt/2011-06/26/content_22859515.htm

文部科学省・日本ユネスコ国内委員会・「歴史的都市景観に関する勧告」

<http://www.mext.go.jp/unesco/009/1351836.htm>

〈内部資料〉

鈴木陽一

2013 『杭州西湖の人文景観與江戸文化』於浙江大学 (PPT 2013.11.6)。

朱錦繡編

2014 『純真年代的回望——純真年代書吧14周年紀念』。

相麗均

2008 『社会治理与公民参与——杭州市「三評西湖十景」的个案研究』浙江大学2008年大学本科卒業論文 (論文導師: 阮雲星)。

陳文錦

2014 「物換星移——文化遺產面對的挑戰和对策」(杭州城市学研究中心2014年年会論文, 非公開) 10月26日。

田野調查錄音記錄 (FTLY 20141214, FTLY 20141226)